

マクロの視点から実践を省察するための一冊

— 『「移動する子ども」学』との出逢い—

安田乙世（大阪在住）

大阪で日本語教育の分野に身を置く者として、日本語を母語としない子どもの「ことば」の教育にどう関わっていくべきなのか、あわせて、その子どもたちを支援する学校教員を含む”大人たち”の人財養成をどうとらえていくのか、そんなことを考えながら日々の実践に取り組んできましたが、ミクロの実践知は集積していくものの、「すべきことに追われる➡時間がない➡整理できない！」という負のスパイラルの中で、自分の実践を言語化して整理し総括できていないという焦りを抱いていました。そんな時、早稲田大学大学院日本語教育研究科オンライン講座と、この一冊に奇跡的に(?) 出逢いました。

本書を読むだけではなく、オンライン講座では著者である川上先生のお話を直に聞くことで、「移動する子ども」学の考察対象やその学問領域、「DLA」と子どもの「ことばの力」等について整理し考察を深めることができました。特に、第6章の5. (P.123~) “「DLA」では子どもの「ことばの力」は把握できない”で語られている内容に触れ、今まで疑問に思わなかった「DLA」の方法論自体について再考し気づきを得ました。

また、海外で「移動する子ども」を育てた自らの経験に照らして読み進めたりするうち、ばらばらだった(自分の)経験と記憶の「点」が「線」につながっていく不思議な気持ちを感じたのは面白い体験でした。

今、世界は、コロナ禍、ウクライナでの戦争、直近に東北で起こった地震…等、とても不安定な状態にある印象です。今後、戦争による異文化間での人の移動もあるでしょう。不測の事態が起こった時、しわ寄せは子どもたちや社会的弱者に集中します。「ことば」の問題で情報から取り残され、社会的不利益を被る人がいなくなる社会構造を創るために、日本語教師の専門性を活かしながら、今自分の立ち位置で何ができるのかを考えていきたいです。

すべての人の幸せを追求する学問領域である日本語教育の学びを深めるためにも、子どもに関わる人もそうでない人も、本書は日本語教師として読んでおくべき一冊だと感じました。